

聖霊降臨節第 21 主日 説教 「主の祈りの内に」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2020 年 10 月 18 日

エレミア書 29 章 4～14 節 ヨハネによる福音書 17 章 13～26 節

主の恵みの中に生かされている私たちは、自らのそうした暮らしぶりを指して信仰生活などと呼んだりもするのですが、ところで、それについて人に尋ねられたとして、皆さんはなんと答えるのでしょうか。そこで、普段、私が感じていることを申しますと、皆さんの多くがこの自らの信仰生活を非常に消極的に捉えられているということです。それは、皆さんの多くが何か足りない、何か欠けているとそう感じるからで、しかも、そのように消極的に捉えるのは、それがいけないこととと思っているからなのではないでしょうか。ただ、何か足りないというところに、私は後ろめたさを感じる必要はないと思います。なぜなら、そう感じ、またそう思うのは、皆さんが信仰というものを至極真面目に捉え、日々過ごしているがゆえのことだからです。つまり、信仰生活とは、私たちが、日々、神様を仰ぎ見ることであり、また、17 章 1 節以下にある主イエスのお姿から分かるように、天を仰ぐ祈りの生活でもあるからです。それゆえ、私たちは、日々襟を正され、歩むのですが、ただし、そこで襟を正され、恐縮し、申し訳なく思うのは致し方ないこととして、それで終わってしまっているのかとも思うのです。そこで、今日は、私たちの祈りの生活を後ろめたさを感じたまま終わらせないためにも、ヨハネによる福音書 17 章 1 節以下の、祈りを献げるイエス様の姿を通して、信仰生活について考えてみたいと思います。

17 章 1 節において始まるイエス様の祈りは、「イエスは・・天を仰いで言われた」との言葉をもって始まっています

が、これと同じ言葉が語られているのが 11 章 41 節のラザロの復活に際してのイエス様の祈りの場面です。そして、ヨハネによる福音書が、このように繰り返しイエス様の祈りについて語るのは、イエス様が普段から祈りを大切にしておられたからです。つまり、一人、神様の御前に静まり、神様との交わりの中で霊的な養いを受け、救い主としての働きに励まれたのが私たちのイエス様であったということです。そして、それは、私たちも同じです。それは、祈りこそが私たちの生活の柱であるからです。

ヨハネによる福音書に限らず、イエス様のご生涯を語る福音書には、祈るイエス様の姿が度々語られていますが、それは、今申しましたように、イエス様が普段から祈りの生活を大切にされるお方であったからです。そして、私たちの信仰生活が、自ずとこのイエス様に似たものとされていくのは、誤解を恐れずに申し上げれば、祈りの生活が半ば習慣化されているからです。つまり、そうするのが当たり前のも、しないと何か落ち着かないもの、それが私たちが日々祈りを献げる理由の一つであり、けれども、そのように習慣化され、また常態化されているからこそ、祈りは私たちの生活の柱になりうるわけです。ただし、そこで大切なことは、イエス様が律法学者を批判して、「見せかけの長い祈りをする」と仰るように、祈りは、その体裁を整えるところに意味があるわけではありません。習慣化し、常態化されたとはいえ、ただやればいい、体裁だけ整えればいい、そういうものではありません。

十字架につくその直前にイエス様が「彼らのためだけでなく、彼らの言葉によって私を信じる人々のためにも、私はお願いします」と祈っているように、イエス様の祈りと願いの内側に生かされているのが私たちなのです。このことはつまり、このイエス様の祈りによって支えられているのが私たちの日々の暮らしであるということです。しかも、そこで大事なことは、それが常態化しているということです。それゆえ、私たちがこのイエス様の祈りに追いやられることはありません。そうであるからこそまた、私たちは自らのその祈りを通し、イエス様の祈りの中に生かされている自分自身を発見し、力づけられることになるのです。ただし、その場合の私たちの祈りではありますが、それは、私たちが疲れたときなどに打つ点滴のようなものではありません。イエス様の祈りに覚えられていることを知り、力づけられたとはいえ、私たちの不安や不満の元が解消されたわけではないからです。ですから、21節でイエス様がその祈りをもって私たちを具体的な方向性に導こうとされているのはそのためでもあるのでしょう。なぜなら、励まされ、そこから一步を踏み出せばこそ、私たちの日々の暮らしは、信仰生活と呼ぶにふさわしいものとされていくからです。

そこでイエス様は、「父よ、あなたがわたしの内におられ、私があるあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らも私たちの内にいるようにしてください。」とこう祈るのですが、このように祈り、御心に従い十字架へと進まれ、そして、復活し、今に至っているのが私たちのイエス様であるのです。このことはすなわち、イエス様を信じる私たちは、それゆえにイエス様とは今も一つであり、さらには、神様とイエス様

が一つであるように、イエス様の執り成しによって、神様とも一つとされているのがイエス様を信じる私たちであるのです。しかも、イエス様は、24節で「父よ、私に与えてくださった人々を、私のいるところに共におらせてください。それは、天地創造の前から私を愛して、与えてくださった私の栄光を彼らに見せるためです」と、こうも祈っておられるのです。つまり、一つであることを願うイエス様の祈りと願いという、この一点で支えられているのが私たちの日々の暮らしであり、それゆえ、それが私たちより取り上げられることは絶対ないと、誰でもないイエス様ご自身がそう仰っているということです。ですから、このイエス様の祈りが神様に聞き届けられている以上、一つであることに破れが生じることはありません。従って、私たちの信仰生活を形あるものとしているのは、このイエス様との一つなる暮らしが約束されているからであり、そうであるからこそまた、そういう私たちの生活形態を指して、御言葉は神の家族と呼んだりもするのです。

ですから、イエス様と一つであると同時に、神様の家族の一員でもあるということは、今日のイエス様の祈りの言葉からも分かるように、それは、私たちにとっての努力目標のようなものでもなく、また、人が持つことを強要される共通理念のようなものでもありません。こうならないといけないものでもないし、また、こうあらねばならないものでもなく、すでにそうなっているし、それ以上でもなければ、それ以下でもないということです。ですから、今ある私たちの姿がそのまま神の家族そのものの姿であり、それゆえ、それを良しとさせていただきつつある方と祈りの内に出会えばこそ、私たちはそれゆえに安心して毎日を過ごすことが

できるのです。ですから、習慣化し、常態化した、そういう私たちの祈りの生活が絶対に悪いものであろうはずがありません。

ですから、あなたの信仰生活とはどんなものですかと人から問われれば、私たちが祈りの内に毎日見ているそのままを言葉にすればいいのでしょうか。ただ、すべての人が上手に自分の思いをそのまま言葉にできるわけではありません。ですから、その場合は、今日の御言葉をそのまま口にすればいいと思います。なぜなら、イエス様が 23 節で「こうして、あなたが私をお遣わしになったこと、また、私を愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります」と祈っておられるように、皆さんの口を通して喜々として語られるイエス様の 17 章のこの祈りの言葉を、私たちが自分の言葉として語ればこそ、私たちを日々励まし、勇気づけ、大きな希望を与える私たちの信仰生活は、その人をしてその喜びが世の人々にも伝わることになるからです。ですから、私たちが本気で信仰生活の喜びを人に伝えたいと思うなら、奇をてらったり、知に働いたりして、人の歡心を買おうとする必要はありません。イエス様と共にいるという、この実感をそのまま表しさえすればそれでいいんだと思います。それは、まさに幼子のごとくということでもあります。そう考えると、エレミヤ書で語られていることは、難しく考える必要もないでしょう。

エレミヤが語るように、イスラエルの人々の置かれた状況は深刻なものでもありました。しかし、イエス様の祈りの言葉を通して、この時のイスラエルを見つめ直すなら、それがまさに幼子のごとく生きる神の民、神の家族そのものの姿でもあるということです。それゆえ、ここ

で神様が仰る余りにも現実的な判断は、幼子に合わせて、神様がいかようにもしてくださる方であるということ、つまりは、私たちが考えるような理屈ではなく、その御心によっていかようにも私たちの暮らしを支えてくださるのが私たちの神様であり、それが、神様の導きの下に生きる神の民の現実であると言えるのでしょうか。それは、今日のエレミヤ書の 12 節で「その時、あなたたちが私を呼び、来て私を祈り求めるなら、私は聞く」と御言葉が語るように、祈りを通して、私たちが神様としっかりと繋がっているからです。ですから、御言葉が私たちに伝えてくれていることは、私たちの祈りの力強さであり、この力強さとはつまり、祈りによって導かれる、地に足ついた私たちの日々の暮らしです。

このように、私たちの信仰生活とは、神様の独り子である、このイエス様の祈りの内に置かれ、それゆえ、神様に私たちが覚えられているがゆえのものであるということです。ですから、エレミヤ書にあるように、例え立場を失うような事態に直面したとしても、私たちの信仰生活そのものは何一つ変わることはありません。それゆえ、今日、それぞれの御言葉が語らんとしていることは、それに尽きるということでもあるのでしょうか。しかし、そこで思い起こすのは、ゲッセマネの園におけるイエス様の祈りの場面です。それを思い起こせば分かるように、イエス様に倣う私たちの祈りの生活は、威勢ばかりの、そういうものではないからです。特に、今日のイエス様の祈りも、ゲッセマネの園での祈りも、それぞれ、十字架の直前というところでは共通しているわけです。ですから、それぞれの御言葉から感じるところは対照的なものでもあります。しかし、そうであるから

こそ、ゲッセマネの園のイエス様の思いを心に留めたいと思うのです。

ヨハネによる福音書のこの箇所は、いわゆる「大祭司としての祈り」と言われているように、十字架につく直前の神の子としての堂々たる風格を感じさせます。けれども、ゲッセマネの祈りと言われている箇所は違います。そこに記されている主イエスの姿は、十字架の定めを前にした弱々しい姿です。しかも、マルコによれば、その時のイエス様は、弟子たちを前にし、ひどく恐れてもだえ始め、そして、その弟子たちに向かって「私は死ぬばかりに悲しい」とこう仰ったというのです。けれども、イエス様のこの弱々しさの中に、私たちは十字架につく直前のイエス様の心の内を見て、時に深い慰めに与るのです。それは、イエス様の弱さに自分自身を重ね合わせるからでもあります。それゆえ、私のような信仰弱き者にとって、ゲッセマネのイエス様の祈りの場面は、信仰を続けていく上での有り難いものとなるのです。ただし、同病相憐れむがごとき慰めを求めてやまない私ではありますが、そこで慰めと希望に与ることが許されるのは、不安と不満が取り除かれるからではありません。不安を抱え、イエス様と同じように一步を踏み出そうとするからです。

自分の思い通りにならない現実には直面したとき、思い通りにならないことへの不満を募らせ、神様に対しても、また人に対しても、さらには、主にある兄弟姉妹に対しても、「不平不満」を訴えるのが私たちの常でもあるのでしょうか。そして、それは、ゲッセマネの祈りの場面が明らかにするように、人の子でもあるイエス様もまた言を俟たない者でもありました。けれども、御言葉はそこで終わらない私たちの信仰をこのイエス様の姿をもって明らかにしてくれているのです。それは、

「アッバ、父よ」と呼びかける神様への信頼です。つまり、この信頼の許に「不安」を引き受け、最後の一步を踏み出されたのが私たちの主、イエス様であり、ですから、私たちの信仰生活は、不安が完全に取り除かれた中で明日を迎えるものではありません。共観福音書にあるように、神様に見捨てられたとの思いを捨てきれなかったのがイエス様であるように、安心と不安との間を行ったり来たりしているのが私たちであるのでしょうか。ですから、そうした揺らぎが私たちの信仰生活に現わされないわけではありません。けれども、ゲッセマネの園でのイエス様の「アッバ、父よ」との呼びかけからも分かるように、イエス様のその背中を押ししたのは神様との一体感でありました。そして、この一体感について同じように語るのが今日の御言葉でもあるのですが、まただから、安心と不安を行き来する私たちは、希望の中に神様が備える明日を信じることができるのです。なぜなら、御言葉と、この御言葉を信じる私たちの日々の暮らしの根底に置かれているものが、私たちを救わんとする、神様とイエス様の揺るぎない気持ちであるからです。

このように、日々繰り返される祈りの内に神様とイエス様と出会い、日々その深い思いを知らされ、歩み続けているのがイエス様を信じる私たちであります。まただから、イエス様と神様を信じる私たちは、この祈りの生活の中で信仰をより確かなものとすることができます。そして、それは、難しいことではありません。私たちがただ神様の御前にいること、イエス様のその御前にあること、私たちの暮らしを支えるこの一点にどこまでも立とうとするところに約束されているものが私たちの暮らしだからです。

祈りましょう。